

Hem21

NEWS

公益財団法人
ひょうご震災記念21世紀研究機構
ニュース

CONTENTS

- ①～③ 第18回アジア太平洋フォーラム・淡路会議を開催
情報ひろば
- ④ 被災地の総合的検証をめぐ
る困難
- ⑤ HAT神戸掲示板
- ⑥～⑧ 人と防災未来センター
MIRAI

「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である
Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。

VOL. **66** 平成29年 11月
(2017)

第18回となるアジア太平洋フォーラム・淡路会議が、8月4日(金)、5日(土)の両日にわたり淡路夢舞台国際会議場(淡路市)で開催されました。テーマは「テクノロジー・カルチャー・フューチャー」。



記念講演

1日目の国際シンポジウム(一般公開)では、200人の参加の下、アジア太平洋地域に関する優れた人文・社会科学領域の博士論文を顕彰する第16回アジア太平洋研究賞(井植記念賞)の授賞式を行った後、4人の講師に記念講演をしていただきました。

石黒浩氏(大阪大学大学院基礎工学研究科教授、ロボット工学者)、濱口秀司氏(ビジネスデザイナー)は、「クロストーク 未来社会を支える知的システムの実現」と題し、まず、石黒氏が「ロボットを作っていると、アイデンティティーとは何かと考えさせられる。人間を映す鏡として、ロボットそのものが文化になるのではないか。日本のように人口が多く、人口密度も高く、平和で貧富のない世界は奇跡に近いが、これが日本でロボットが強い理由だ。ロボットは日本の重要な文化であり、それが人類の文化に発展していく未来が見えると楽しい」と述べました。

続いて、濱口氏が「テクノロジー・カルチャー・フューチャーについてシステムチックに理解しなければならない。われわれはカルチャーに対して論理のメスを入れなければならないタイミングにある。また、現時点で知的システムと人間の関係に結論を求めない方が

第18回アジア太平洋フォーラム・淡路会議を開催

いい。われわれが愛情を持って育てないといけない」と述べ、「カルチャーに理論を」「知的システムに愛情を」の2点を提言しました。

最後に両氏のクロストークが行われ、「ビジネスの世界では、インターフェースの戦いが起きている。世の中のインターフェースのうち、移動上のインターフェースはAppleとGoogleに牛耳られた。残された、固定環境のインターフェース、半固定環境のインターフェースの2つで、日本を含めたアジアのどこかの国が頑張らないといけない」「アメリカやヨーロッパだから頭打ちになっているところがあって、日本のような文化からこれまでの認識を超えたインターフェースが作られる可能性があるのではないか」といったことが語られました。

太刀川瑛弼氏(NOSIGNER代表取締役、慶應義塾大学大学院SDM研究科特別招聘准教授)は、「未来のデザインを生み出すための、過去に回帰するデザインの話」と題し、「新しいものを作るのが必ずしもデザイナーの仕事ではなく、どういうものにそのデザインをひも付けていくのかという関係性の方が極めて大事である。『どう関係をつくっていくのか』は『どう形を作っていくのか』と不可分であり、この両者を考えることがデザインである」「流動性の無い領域と領域の間に回路を流すことにより、新しい結合が生まれる。ムーブメントや文化ができるときは、流れていないところの堰をどうやって切るのが大きなテーマになる。流動を生み出すことが、恐らく私たちが『イノベーションを起こす』と呼んでいる行為なのだ」と述べました。その上で、「人間は簡単に進化することはできないが、何かを作ることができる。それは一歩でも進もうという人間の本能だ。その中でどのような方向に進化したいのか、また、どのような技術を使ったらそれが可能になるのかを考えるのが、私たち人間なのである」と結びました。

伊藤博之氏(クリプトン・フューチャー・メディア株



基調提案

式会社代表取締役)は、「初音ミクがなぜ世界で支持されるのか」と題し、まず、「初音ミクは、人間の歌声を合成する技術(VOCALOID)を用いたソフトウェアだ。初音ミクが知名度を得たのは、リリース前に動画共有サイトが始まっていたことが大きい。初音ミクで作った曲の発表先は、ニコニコ動画やYouTubeなどビジュアルを伴うインターネットメディアが中心であった」「また、ソフトウェアにキャラクターをつけていたが故に、一つの作品をモチーフにして派生的にいろいろな作品が生まれてくるという『創作の連鎖』が、動画共有サイトを中心に広がっていった。こうしてソフトウェアとしての初音ミクに加えて、キャラクターとしての初音ミクというものも知られていった」と述べました。その上で、「このようなムーブメントを日本から発し、世界に対して大きくインパクトを与えているということに、面白みと誇りを感じている」と述べました。

2日目は、淡路会議メンバー等60人(他に一般から5人の傍聴者)の参加の下、フォーラムを開催し、3人の講師に基調提案をしていただきました。

山口高平氏(慶應義塾大学理工学部教授)は、「人とAIが協働する未来社会」と題し、「学習にディープラーニングという手法を使ったAlphaGoというAIが、世界ランキング2位のLee Sedolというトッププロ棋士に勝ったが、AIは人の知的な振る舞いをシミュレートするソフトウェアであり、業務や使うAIの技術によってその限界などがかなり変わってくる。従って、AIと大きくくりせず、細分化したAIの特徴を理解して、人との関係を考えるべきだ」と述べました。その上で、「人とAIの協働社会に向けては、職業単位で考えるのではなく、業務プロセス単位で考えるべきだ。そうすると、人が得意とすることと、AIが得意とすることで仕事を分けることができる。ヒト・モノ・カネ・情報が4つの経営資源といわれているが、AIを第5の経営資源と考えてトータルに考えていくことが必要ではないか」と提案しました。

吉田慎一氏(株式会社テレビ朝日ホールディングス代表取締役社長)は、「メディア激動と社会の変容—マスメディア再定義の時代」と題し、「IT技術やソーシャルメディアなどの発展で、若い世代のテレビ離れ、新聞離れが進む中、新聞・テレビもインターネット事業に進出している。一方、メディアが非常に相対化されてきて、既成のマスメ

ディアがone of themになり、それとは別に巨大な情報の流れが社会の中で出てくると、社会が断片化されてくる。フェイクニュースやメディア不信という問題もある」と現状を述べました。その上で、「報道という機能について再定義をしなければならない。また、民主社会の共通の情報基盤をどうするかということは、真面目に論議しなければならない。社会での情報流通、情報基盤をインターネットプラットフォームに任せておいていいのか、どのように任せるかという問題は、フェイクニュースのファクトチェックの問題と並んで、20世紀型マスメディアに限らず社会を考える上で重要な問題ではないか」と提案しました。

塚本昌彦氏(神戸大学大学院工学研究科教授)は、「ウェアラブル・IoTが切り拓く未来」と題し、実際にHMD(Head Mounted Display)を装着して登壇。まず、「ここ50年でコンピューターは非常に小さくなり使い方が変わってきた。最初は軍事や科学技術計算用だったのが業務用になり、個人用になり、スマホになった。さらに小さくなると、人が身に付けて利用するウェアラブル(wearable computing)の時代が来る。また、小さくなったコンピューターを物が使うというのがIoT(internet of things)だ。スマホ以上に小さくなったコンピューターは、実空間で使うというのがポイントだ。まだ普及していないが、応用分野は幅広く、ヘルスケア、スポーツ、観光業、農業、医療・介護、警察・警備などの分野でトライアルが行われている」と述べました。最後に、「ウェアラブル・IoTによる実空間ファーストな世界を推進しよう」「来年の淡路会議では皆HMDを装着して参加しよう」「インプラント、サイボーグのビジネスは日本から立ち上げよう」「私は15年以内にサイボーグになる」と4つの提案をして締めくくりました。

基調提案の後、参加者は、「テクノロジーにける未来」「カルチャーにける未来」「テクノロジーとカルチャーの融合にける未来」の3つの分科会に分かれ、それぞれのテーマで活発な討論が展開されました。

午後からの全体会では、冒頭に分科会での討論の概要について各分科会座長から報告をいただいた後、参加者全員でさらに議論を深め、最後に阿部茂行氏(同志社大学政策学部教授)から総括と謝辞が述べられ閉会しました。



全体会

■国際シンポジウム(8月4日)

◆記念講演

コーディネーター: 窪田 幸子(神戸大学大学院国際文化科学研究科教授)

- ①クロストーク 未来社会を支える知的システムの実現
講師: 石黒 浩(大阪大学大学院基礎工学研究科教授、ロボット工学者)
濱口 秀司(ビジネスデザイナー)

- ②未来のデザインを生み出すための、過去に回帰するデザインの話
講師: 太刀川 瑛弼(NOSIGNER代表取締役、慶應義塾大学大学院SDM研究科特別招聘准教授)

- ③初音ミクがなぜ世界で支持されるのか
講師: 伊藤 博之(クリプトン・フューチャー・メディア株式会社代表取締役)

■フォーラム(8月5日)

◆基調提案

コーディネーター: 村田 晃嗣(同志社大学法学部教授)

- ①人とAIが協働する未来社会
講師: 山口 高平(慶應義塾大学理工学部教授)
- ②メディア激動と社会の変容—マスメディア再定義の時代
講師: 吉田 慎一(株式会社テレビ朝日ホールディングス代表取締役社長)
- ③ウェアラブル・IoTが切り拓く未来
講師: 塚本 昌彦(神戸大学大学院工学研究科教授)

座長: 中尾 優(特許業務法人有古特許事務所所長)
第2分科会「カルチャーにかける未来」

座長: 佐竹 隆幸(関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授)

第3分科会「テクノロジーとカルチャーの融合にかける未来」
座長: 矢崎 和彦(株式会社フェリシモ代表取締役社長)

◆全体会

コーディネーター: 片山 裕(神戸大学名誉教授)

◆総括と謝辞

阿部 茂行(同志社大学政策学部教授)

◆分科会

第1分科会「テクノロジーにかける未来」

情報ひろば

兵庫県こころのケアセンター

平成29年度第2期「こころのケア」研修の受講生募集

「こころのケア」に携わる保健・医療・福祉・教育等の分野で活動されている方を対象に、各種課題への対処法等について学ぶ「専門研修」を実施しています。

来年1月から2月にかけて実施する研修の受講生を次のとおり募集します。ぜひご参加ください。

▶研修概要

区分	コース名	期 間	定員	対 象	受講料 (資料代等)
専門研修	①消防職員のための惨事ストレスの理解と予防	1月25日(木) 26日(金) (2日間)	35人	消防職員	3,500円
	②対人支援職のためのセルフケア	1月31日(水) 2月1日(木) (2日間)	35人	保健・医療・福祉関係の対人支援業務従事者(保健師、ケースワーカー、各種相談員、福祉施設指導員等)、教職員、スクールカウンセラー、保育職員等	3,500円
	③発達障害とトラウマ	2月8日(木)	35人	こども家庭センター(児童相談所)職員、福祉事務所職員等児童虐待関係職員、保健所職員、教職員、スクールカウンセラー、保育職員等	2,500円
	④子ども達のいじめのケア-加害と被害の連鎖-	2月15日(木)	35人	教職員、スクールカウンセラー、教育委員会職員、こども家庭センター(児童相談所)職員、いじめ相談窓口の相談員、保育職員、児童福祉施設職員、司法関係職員	2,500円

▶場所=兵庫県こころのケアセンター(阪神「春日野道」駅から南へ徒歩約8分)

▶申し込み方法=受講申込書(※)に必要事項を記入の上、郵送、FAX、Eメールで下記までお送りください。申し込み多数の場合は、各研修開始日の1カ月前(前月の同じ日)の17時を期限として、初めて受講の方を優先の上、抽選で決定します。

※当センターホームページからダウンロードできます。

●申し込み・問い合わせ

兵庫県こころのケアセンター 研修情報課

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2

TEL 078-200-3010 FAX 078-200-3017 Eメール kensyu@j-hits.org http://www.j-hits.org/